

大学院からの地域連携：地域社会から学びを得るための5講

<https://doi.org/10.15017/2560395>

出版情報：2020-03-30. Graduate education and research training program in decision science for a sustainable society Kyushu University

バージョン：

権利関係：

大学院からの 地域連携

地域社会から学びを得るための5講

九州大学
持続可能な社会のための決断科学センター
統治モジュール 編

大学院からの地域連携…社会から学びを得るための5講 二〇二〇年三月三十日発行 ©2020, Institute of Decision Science for a Sustainable Society, Kyushu University. Printed in Japan
発行 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター 〒八一九・〇三九五 福岡県福岡市西区元岡七四四
大学院からの地域連携…地域社会から学びを得るための5講



大学院からの 地域連携

地域社会から学びを得るための5講

九州大学
持続可能な社会のための決断科学センター
統治モジュール 編

本書は、大学院生が専門分野と並行した学びのフィールドとして、地域社会とつながりを持つことを促す教科書を意図して作成しました。そのために、九州大学持続可能な社会のための決断科学センター統治モジュールで地域社会との連携に取り組んだ5名の修了生の学びのヒストリーを整理し、大学院生の時期に地域と関わりを持つことでキャリアや学びに対する考え方に起こった変化を取りまとめました。

持続可能な社会のための決断科学センターは、文部科学省が2011年に開始した「博士課程リーダーシッププログラム」をきっかけに生まれました。ここでは、人類社会が直面している課題の解決に向けて、新しいオールラウンド型の科学を発展させるとともに、その担い手として幅広い視野・知識・経験を持つ若いリーダーを育てることを目標にし、環境・災害・健康・統治（ガバナンス）・人間の5つのモジュールを設定して教育プログラムを実施しています。そのうち統治モジュールは、地域社会の持続を「地域内のことをそこに住まう人々が自ら考え、決定し、実行できる状態が維持されること」と捉え、様々な背景を持つ大学院生が地域社会と統治機構、大きくは国家や国際社会との関係まで視野に入れ、具体的な地域での実践活動に取り組んでいます。

大学院で得られる一つの大きな学びは専門性の深化ですが、並行して専門と社会の関係を学ぶことも重要です。専門性を深めることで社会課題に対する高度な思考能力が身につきますが、その力を過不足なく活用するための「既存の」社会の受け皿は少なくなるのが実情です。大学院で学ぶ学生は、専門性を追求すると同時に、自分の専門が社会とどのようにつながるかを学び、時には自分で専門性が発揮できるビジネスやフィールドを開拓することが求められるのではないのでしょうか。地域社会での実践は大学院生が実社会で専門性を活かして生き抜く力を身に着けるための、教養の一つといえるでしょう。

実際に、本書で取り上げた5名はいずれも大学院での学びを通して地域社会と深く関わり、現在はそれぞれ研究者（医療系・工学系）、情報コンサルタント、情報系ベンチャー企業、自治体職員と、多様なキャリアを歩んでいます。彼らが地域に飛び込んだ時期の思いや葛藤、そしてそこから得てきた学びを辿ることで、地域社会からの学びのポイントが見えてきます。これから大学院で学ばれる皆さんは、是非彼らの道のりと自分の思いを重ね、それぞれの環境で地域社会から学ぶ方法を模索してみてください。

（本書で紹介する地域社会での学びのポイント）

- ・ 自分の関心がどこにあるかを意識して、住民の方々と対話を行う【第一講】
- ・ 観察するだけではなく、一員として取り組みに参加する【第一講】
- ・ 既に知識として知っていることも、現場の生の声を聞いて確認する【第二講】
- ・ 地域住民のニーズを探り、つながりを深める方法を考える【第二講】
- ・ 最初は受け身でも構わないので多様なフィールドに参加してみる【第三講】
- ・ 学びに感じる違和感を大事にし、長い視点で地域社会をみつめる（急いで答えを求めない）【第三講】
- ・ 専門で得られた知見が地域の方々に伝わる方法を模索する【第四講】
- ・ 地域で得られた知見を基に専門で学んだことを再考する【第四講】
- ・ 人と人のつながりや関わりを意識して地域を観察する【第五講】
- ・ 提案するだけでなく、企画の立ち上げから成果報告まで通して経験する【第五講】

第1講・漠然とした課題意識が具体化する
森田海（五島市役所水産課）

- 幼少期の大島の環境と生き物への関心 8
- 環境としての地域の営みへの興味の気づき 9
- 被災地調査を通じた地域経験 10
- 中山間地域の集落との交流を通じた地域経験 12
- 地域社会から得られた学びと現在の自分 13

第2講・現場で得た問題意識がキャリア意識につながる
上妻潤己（株式会社リシヨブ）

- 地域の現場を訪ねる学びへの目覚め 18
- 研究に行き詰まり地域社会に飛び込む 20
- 対馬滞在で見えてきた地域社会の課題 21
- 高校生に向けた地域課題の学びづくりへの挑戦 22
- 地域社会から得られた学びと現在の自分 23

第3講・違和感を確かめながら自分の関心と社会の接点を探る
土中哲秀（中央大学理工学部助教）

- 専門分野「理論計算機科学」との出会い 28
- 数理工学と社会の接点の模索と葛藤 29
- 大学院のプログラムによる地域社会との接触 31
- 地域社会から得られた学びと現在の自分・専門分野と社会の接点 33

第4講・理論と実社会の問題をつなぐ現場感覚を身に着ける
徳永翔太（日本能率協会総合研究所）

- 政治学と評論の面白さに熱中した学部時代 38
- 理論と現場の違いの気づき・対馬島おこし実践塾での取り組み 39
- 理論と現場との往還・シテイズンシップ教育の実践 41
- 地域社会から得られた学びと現在の自分 43

第5講・職能家教育では得がたい多様性のマネジメントを学ぶ
古橋寛子（九州大病院メディカル・インフォメーションセンター学術研究員）

- 歯科医である父の影響と社交家である父の影響 48
- サークル活動を通して知った社会活動の面白さ 49
- 大学院でまちづくりへの思いに再会する 50
- 歯学部専門の学びと地域社会での学びの違い 51
- 得られた新たな学びのテーマ 52
- 子育てと活動と研究の並立期 53
- 地域社会から得られた学びと現在の自分 54

第1講

漠然とした課題意識が 具体化する

五島市役所水産課

森田 海

2012年に九州大学法学部に入学した森田海さんは、当初行政職員だった父親の影響で大規模な開発プロジェクトに関われる土木行政職への興味と、生まれ育った離島の自然環境の2つの興味の間で学部時代の学びに臨んでいましたが、学部の終わりに地域の人々の営みへの関心に気がつきました。きっかけは、生育地と同じ長崎県の離島での暮らしをテーマにしたアニメーションでした。

森田さんは、大学院の時期に熊本地震の被災地での復興支援や、福岡県八女市の中山間地域の活性化活動に関わる中で、新たに気がついた自分の関心を今後の活動として具体化するためのヒントを掴んだようです。現在は離島の自治体で行政職員として働きながら、地域との関係を模索し続ける森田さんの活動から、現場を通して地域社会とつながるための学びが見えてきます。

地域社会での学びのポイント

- 自分の関心がどこにあるかを意識して、住民の方々と対話を行う
- 観察するだけでなく、一員として取り組みに参加する



森田さんへのインタビューのため五島市を訪問（2019年10月）



私は2018年から長崎県内の離島地域である五島市で市役所職員として勤務しています。行政職で入庁し現在は水産課に勤務していますが、大学学部での専攻は土木工学でした。大学時代の専門として土木工学を選択した背景には父親の影響があります。私の出身地は長崎県西海市の大島町です。大島町は元々離島で、1999年に大島大橋が完成して九州本島と陸続きになりました。父親は大島町の土木技術職員で、父が道路や川を設計している様子を家で見っていました。特に、大島大橋のプロジェクトについては、動画を見せてもらいながらプロジェクトの様子を誇らしげに語っていたことを覚えています。父親のような働き方に憧れがありました。

幼少期の大島の環境と生き物への関心

大学3年生ぐらいまでは自分のキャリアややりたい事は特に意識せず、授業に関する勉強をするという感じの学生でした。構造力学や流体力学など、物理工学系の勉強には苦手意識を持っていましたね。サークル活動ではサッカーを楽しみつつ、勉強して遊んで、夜までお酒を飲んでと、普通の大学生のような思い出しか残っていません。比較的受身に過ごしていたのではないのでしょうか。少しキャリアに対する意識が出てきたのが大学3年生の時に参加した国土交通省のインターンシップで、土砂崩れやダムの修復現場を見学し、大きなプロジェクトに関われる国の行政職員に興味を持つようになりました。

一方で、自分の育った大島の環境から受けた影響も大きく、大学時代も土日には実家に帰って過ごすことも多かったです。出身地にはすぐ近くに海や山や池があつて、子供の頃から自然の中で遊んでいました。カブトムシ、クワガタ、カエルなど、自然の中の生き物をとって家で育てる事が好きでした。生物学というよりも自然の中の生き物が好きで、自然と関わるような生き方や仕事が行いたいという思いも持っていました。大学4年生の時は所属する研究室を選ぶことになりましたが、土木工学科の中でも一番生物に関われそうな研究室を選びました。研究テーマについては、大島町には遊べるような河川がなかったことから河川にも触れてみたいと思い、卒業論文では河川の生物を扱えるテーマとして、貝類を指標にした河川環境の評価研究を行いました。

この研究では生物の多寡から環境を評価するアプローチを行いました。環境の影響を受けやすく、且つ調査の対象にしやすいのが貝類です。研究では九州北部の20の河川を対象として、50cm四方の範囲に生息する貝類を調査しました。砂礫の割合や上流の様子などを含めて分析を行って、生物多様性のある河川を維持しつつ、河川開発をするにはどのようなにするかについて考察を行いました。目標を持って色々な地域に出かけ、調査した成果を基に研究を進めていく初めての経験でした。

環境としての地域の魅力への興味の気づき



大島大橋 (2020年3月)



百合岳展望台からの大島の風景 (2020年3月)

研究はとても楽しかったのですが、同じく4年生の時期に興味の対象が人に変化しました。夏休みに実家で見たアニメーション「ばらかもん」*に影響を受けました。ばらかもんの舞台は五島で、東京から来た書道家が島の個人的な人間や生活に触れながら人間的に成長していくといったストーリーです。ちよつとしたきつかけではあるのですが、自分の育つた大島と重なる所も多く、離島の自然の中で古くからのお祭りや環境と調和しながら暮らしている人間の営みを残す事は、自然の中の生き物を残すことと同じく重要ではないかと、暮らす人々に目が向くように地域を見る目が変化しました。

4年生が終わり大学院に入る時には、お祭りなど日本らしい人々の営みを残した地域に入って、可能であればそれを残していくような仕事をしたという思いを持つようになりました。インフラの建設を通して日本を守ることから、地域の生活そのものをどうやって守るのかに興味が広がってきた時期かもしれません。そのような思いを指導教官に伝え、新たな研究テーマを模索していたのが修士課程1年生の時期です。大学院には修士課程の2年間で籍を移しました。その間、震災の被災地や中山間地のコミュニティと密に関わることになりました。

被災地調査を通じた地域経験

まず、修士課程進学後の4月に熊本地震が起きました。身近な地域でこのような大

災害が起きた影響は大きく、ゼミで被害の大きな地域を幾度か訪問する中で復興の課題に興味を持つようになり、活動は最終的に修士論文のテーマになりました。論文のタイトルは、「被災した地域に寄り添った復興支援活動に関する研究―熊本地震により被災した樫ヶ丘地域での復興支援活動を例に―」です。熊本地震では津波や火災の被害はありませんでしたが、家屋被害が大きかった災害です。家屋が倒壊等で使用できなくなることで住民の移動が発生します。地域コミュニティは残っても、住民間の関係が大きく変わってしまうのではなにか。そのような中で、小さなコミュニティに寄り添う形の復興支援のあり方を考えました。

研究対象にしたのは熊本市北区の樫ヶ丘地域のユニークな取り組みである復興支援ハウスです。これは被害が比較的軽微であった家屋を改修し、復興ボランティアの拠点にするプロジェクトです。テーマは所属している研究室のつながりから得られたものですが、樫ヶ丘に20回以上通って直接現場を見てきた経験は刺激的でした。地域では4月の震災から年末までに6回の住民談義会が開かれました。被災地では住民が重要だと思ふ課題や人々の関係が徐々に変化します。沢山の声を聞いて目に見えない問題を明らかにしながら優先順位を考えながらプロジェクトが進められ、地域の居場所が出来上がっていく。漠然と考えていたコミュニティとの関わり方が少しずつ見えてきました。

調査での成果以外にも、地域に何度も通う中で多くの学びがあったと思います。生活の様子に触れ、暮らしを共有し、直接話を聞く中でしかわからないことが沢山ありました。鍵のかかっていないに地域のお宅に自由に出入りして、地域の方と一緒に被災地の問題や復興の方法を考え、時には一緒にお酒を飲んで遅くまで様々な話をするなど、様々な新鮮な体験

*ばらかもん
長崎県・五島列島を舞台に、都会育ちの書道家と島民の交流を描いた漫画作品。2014年にアニメ化が行われた。「ばらかもん」は、五島列島方言で「元氣者」の意。



熊本地震被災地支援大学間ネットワーク会議への参加 (2016年7月)



熊本地震被災地にて、耐震性を考えた拠点づくりの取り組み (2016年7月)

がありました。言葉にすることは難しいですが、こうした経験は地域の方との接し方を肌感覚で掴むきっかけになったと考えています。

中山間地域の集落との交流を通じた地域経験

この時期に並行して決断科学プログラムに参加しました。プログラムでは研究室では扱わない生き物や生活文化といった自分の興味とつながるテーマとして、震災の生物多様性への影響を探る田んぼの生態系調査や、中山間地域で人口減少が深刻な八女市星野村の鹿里集落の持続のための取り組み調査を行いました。鹿里集落については、プログラムの実習で八女市星野村の住民の方にお会いした機会に自分の興味をお話しし、多くの集落の元気が無くなっている中で積極的に活動を続けている地域としてご紹介を受けました。電話で鹿里ふるさと会の事務局の方に聞き取り調査の依頼を行い、合わせて花焼きという集落で毎年行われているイベントを見学させていただきました。2017年1月のことで、その時点で既に熊本大震災の被災地に1年近く通っていたので、地域へのアプローチの方法には最初の頃より大分慣れていたなと思います。

その後、自分でレンタカーを借りて鹿里に通ったのが修士課程の2年生の時期です。集落には高齢者がたくさんいるが子供が少なく、奥の方の集落はもう消滅し始めています。鹿里はその中でも比較的上手く集落が持続に向いていて、周辺から着目されるような祭り

もあります。その理由を探るため、男女それぞれのまとめ役の人と繋がり、色々な人を紹介していただいて話を聞いて回りました。活動の牽引役の方の思い、周りの方がついていく理由、活動を進める中での反発、料理会や伝統料理の継承など女性の集まりの工夫など。得られた実感は、地域内の住民の方々はそれぞれいろいろな思いを持っているが、他の住民それぞれの考えていることをある程度理解していて、互いの思いに寄り添う意識を持っている。その背景として頻繁に顔を合わせるコミュニケーションを行なっているということです。これは、住民間の関係だけでなく、私のような外から尋ねる者が地域に受け入れてもらうためにも重要なことだと思います。

鹿里集落とすっかり関わられたのは半年余りでしたが、最終的には彼岸花祭りという集落で一番大きなイベントに参加させてもらいました。他のプログラム生に集落の魅力を伝えて手伝いを依頼し、地域の人のアイデアであった廃棄物になりそうな大根を来訪者にプレゼントするための人手を確保しました。短い期間ながら声を聞いて寄り添う取り組みができたことは非常に嬉しく、祭りの終わりには飲み会にも呼んでいただきそのまま地域の方のお宅に泊めていただきました。学術的には十分なことではできませんでしたが、いろいろな方とお酒を飲んで遅くまで地域社会や鹿里の未来について話をしたことは得難い経験で、五島に来てからも生きていきたいと思います。

地域社会から得られた学びと現在の自分



鹿里棚田彼岸花まつりの運営への参加 (2017年9月)



鹿里集落の住民の方へのヒアリング (2017年2月)



鹿里集落の門松を焼く伝統行事「花焼き」の様子 (2017年1月)



星野村の地域リーダーの方から鹿里村の紹介を受ける (2016年12月)

私は大学院に入学した時は、博士課程まで5年間研究するつもりでした。被災地や鹿里での人との繋がりと、そこでの地域社会を維持するための様々な取り組みや工夫を見たことが、2年の修士課程を終えた後に行政職員として五島市で働くことを考える変化につながったと思います。五島を選んだ理由は、影響を受けたアニメーション「ばらかもん」の舞台であることもありですが、何より自分が離島地域で生まれ育ったことが大きく、離島地域の方々に寄り添い、生活文化を守るために何ができるか考えたことにあります。出身地の大島は2005年に合併して離島の地方自治体ではなくなっていました。職種も土木職ではなく行政職で応募しました。大学院での学びを通してやりたいと思っていたことが大分変化したなと思います。

2018年4月に就職した時点では縁の全くない五島でしたが、祭りに出たり高齢者と対話したりする中で地域の方と関係を作れることがわかっていたので、仕事の他に積極的に様々な場所に顔を出しています。40代位の方々が中心に集まって地域づくりの様々なイベントを行なっている「岐宿コッパ会^{*}」のメンバーとして活動する他、伝統行事のちゃんこ^{*}や消防団にも参加しています。水産科なので漁師の方々と仕事をすると仕事の後に飲むことも多いですね。お酒の好きな方がたくさんいるので、宴会が4次会まであることも普通です。仕事が忙しい時期だと厳しいこともありますが、地域の方と酒を飲んで対話することの重要さがわかってるので楽しんで参加しています。プライベートでも親身に使っていただくことになり、仕事上での縁となる人間関係にもつながっています。

新入職員1年目でそのようなつながりを作ってきたので、土日はいろいろな地域のつながり

でほぼ埋まるようになってきました。最近では家のリフォームの手伝いに呼ばれて、そこでも様々な方に知り合えました。いろいろな所に顔を出せるようになってきて、これから自分がメインで仕事を任せられるようになって、アドバイスをもらえるネットワークが形成できてきたのではないかと考えています。学部生の終わりに持ち始めた離島地域の暮らしを支えることへの憧れは、今思うととても漠然としたものだった気がします。大学院生で現場に何度も通ったこと、今五島で働きながら色々な人と関わっていることで、だんだんと自分の興味や楽しみと社会の役割のつながりがはつきりしてきました。といってもまだ2年目の職員なので、これからも五島で働き、暮らす中で見えてくるものがまだまだ沢山ありそうです。



五島市福江島の風景（2017年7月）

^{*}岐宿コッパ会

2016年4月に結成された若者によるまちづくりグループで、島の男性と島内外の女性との出会いの場を提供する婚活イベントや、離島留学生の体験授業の講師等の取り組みを行なっている。「こっぱ」は、五島列島方言で「未熟者」の意。

^{*}ちゃんこ

五島市を中心に伝わる古い念仏踊り。毎年旧盆の8月13日から15日にかけて市内各所で行われる。長崎県指定無形民俗文化財。



五島市役所水産課での勤務の様子（2020年3月）

第2講

現場で得た問題意識が キャリア意識につながる

株式会社リジョブ

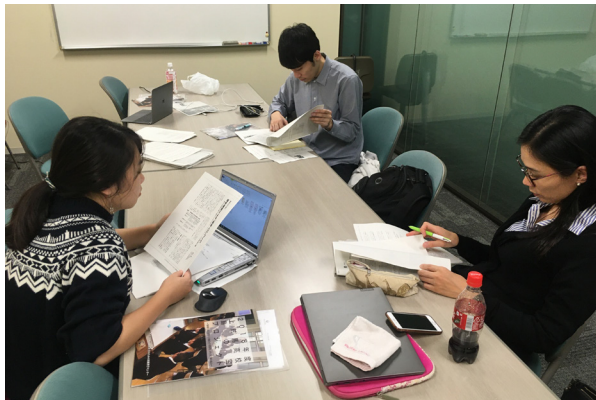
上妻 潤己

2011年に九州大学法学部に入学した上妻潤己さんは、地域の現場体験を重視する学部ゼミ活動を通して、地域の生の声から課題を知る重要性に気がつきはじめます。その後、大学院に進学して、具体的なテーマが定まらず漠然と研究を進めていることに挫折を覚えた上妻さんは、大学を一年休学し、かねてから関心を持っていた長崎県対馬市に地域おこし協力隊として勤務しました。

対馬市での仕事と居住の経験は、キャリアに対する意識にも大きく影響を与えました。就職先として現在働く情報系ベンチャーを選択した背景には、対馬市で実感した高齢化や雇用状況の問題意識があるようです。上妻さんの活動を通して、地域の生の声を聞くことや、実際に居住者として飛び込むことで得られる学びが見えてきます。

地域社会での学びのポイント

- 既に知識として知っていることも、現場の生の声を聞いて確認する
- 地域住民のニーズを探り、つながりを深める方法を考える



上妻さんへのインタビューの様子（2019年12月）



私は学部卒業後に、大学院修士課程に4年間在籍しました。そのうちの1年間は長崎県対馬市で地域おこし協力隊(学生研究員)として過ごしました。現在は情報系のベンチャー企業に勤務していますが、1年間対馬で過ごしたことが今のキャリアの選択につながっています。

地域の現場を訪ねる学びへの目覚め

私が勉強を楽しいなと思い始めたのは、地域に出て学ぶゼミに所属した頃からでした。高校の時は勉強よりもバスケットに熱中していて、進学する時も学びたいことがあつたというよりは、高校の成績で大学を選択し、潰しがきく程度の感覚で法学部を選択しました。大学に入学した直後も学びに積極的になつたわけではなく、授業も単位が取りやすいものを選択していましたね。

ですが、1年生の時に地方行政のゼミに入り、地域の現場と理論の両方を通して学ぶ経験をしてから、勉強が面白いと思うようになりました。法学部には1年生のときからゼミに参加する仕組みがあり、面白いゼミがあれば2年、3年と継続できました。私が所属したゼミは、政治とは何か、他者とは何か、生命とは何かなど、法や社会に対する考え方の根元を問うような授業と同時に、実社会と合わせて理論を考えるための現場で体験を重視していました。記憶に残っているのは、熊本県水俣市のゼミ実習です。公害病の被害者の

生の声を聞いたときに、社会の不条理に対し知識だけで理解したつもりになっていて、問題として実感を持つて考えていなかったことに気がつかされました。

対馬に興味を持ったのも、4年生の実習で対馬を訪れたことがきっかけです。なぜ興味を持ったかという一言では説明できないのですが、とにかく新しい情報が多かつた。まず、大学院を出た方々が島で高齢者と一緒に課題解決に取り組んでいる。そういう生き方があることを初めて知り、衝撃を受けました。高齢者の方は稲作が始まった時期の伝承が地名に残っているような、長らく受け継がれてきた記憶が喪失することに寂しさを感じており、これは耳学問で得ていた限界集落の課題とは違った視点でした。また、島外から来て柔軟に働く公務員や、市長が飲み会に参加するような行政と市民の近さなど、自分が知っていると思い込んでいた「地域」とは全く異なる社会がそこにありました。あとはとにかく魚が美味しかったですね。毎日その日に漁師が釣ってきた魚を食べるんです。

それまでは、地域の問題解決には地域の人をもっと頑張る必要がある、限界集落も住民がもつと主体的に頑張ればなんとかなる、そんな風に考えていました。そういう側面は確かにあると今でも思っていますが、対馬の状況を見てそれは地域の問題の一面しか見えないことに気がつき、卒業論文では地域の主体性を促す考え方がいつ頃からどのように生じてきたかをテーマに選びました。

研究に行き詰まり地域社会に飛び込む

その後修士課程に進んだのですが、地域の人が主体的に地域づくりを行うための課題に関心を持っていたものの、具体的なテーマはぼんやりして定まっておらず、とりあえず地域に足を運んではいるが、何をやったらいいかわからない状態でした。特に就職活動をしていただけでもなく、漠然と博士課程に進むことを考えていて、2年で修了しようとか修士論文の原稿をまとめたのですが、地域に対する国の政策史を並べただけの報告書のようなものが出来上がりました。その論文を提出前日に指導教官に持っていた時、「一言、君はどう思う?」とだけ問われ、自分でダメな理由もわかっていたので提出を取り下げました。

この時が、これまでは人生のレールに乗って経験を積んできた自分が初めて挫折した経験だと思えます。しばらくは落ち込んでいたのですが、これが機となつて自分のやりたいことをやろうと吹っ切れて、その直後の2月に募集のあった対馬市の学生研究員に応募しました。これは地域おこし協力隊の学生版で、1年間学生が対馬について関心のあることを研究しながら、並行して対馬市の職員として域学連携事業に従事する制度です。無事に採用が決まり、翌年は対馬に滞在しながら働くことになりました。

対馬滞在で見えてきた地域社会の課題

対馬に在る間に本当に色々な経験をさせてもらいました。役所の仕事の他、地元の消防団など、地域の活動に参加して、地域の若手の方々とは毎晩酒を飲んで話をする日々です。仕事として与えられる使命もユニークなものも多く、一つは昔対馬で会社員の下宿であった建物「梅花荘」に住まいつつ、地域に学生が来る時の拠点としての運営のサポートをすることでした。梅花荘のオーナーの方は梅子さんという80代の高齢女性で、学生が滞在しない時期は広い建物で一人暮らしをしていました。この生活で、離島の高齢者の暮らしについて実感を持つて体験することになりました。

梅子さんは足が悪く自由に外出することが難しい。子供が三人いるがそれぞれ島外に家族を持ってほとんど帰ってこない。そのような中で孤独を感じていました。一緒に暮らしていて気がついたのは、高額な健康商品を売りつける詐欺商法の被害に遭っていたことです。商品に問題があることは薄々理解しているのだけど、訪問して健康を気遣って色々話してくれること自体が嬉しくて買ってしまう。他にも島の高齢者と接する中で、一週間近所の人にも合わずにテレビを見ているだけの生活をしている方や、経済的に困窮し、生活保護をもらっていることで地域の方と意識の壁ができてしまっている方など、色々な孤独の問題の形があることが見えてきました。



梅子さんの誕生日会でのツーショット (2017年)



梅花荘の寮長として韓国からのインターンシップ生と交流 (2017年10月)



田んぼオーナー制度を導入した志多留集落において田植え作業を経験 (2015年6月)

そのような問題に触れつつも、梅子さんと日々接し、来島した学生と梅子さんのコミュニケーションも作っていく中で、彼女が元気になっていく様子が実感できたことはとても貴重な経験でした。1年間は短かった。色々な人の話を聞くことができましたが、自分ができることはこれを報告書にまとめることが精一杯で、たくさんの心残りがあります。報告書には提案なども残して去りましたが、提案を作るだけでは地域社会は動かないことは実感として分かっていました。

高校生に向けた地域課題の学びへの挑戦

翌年は大学に戻ったのですが、対馬とは継続して関わりを持ち、修士論文の作成と並行しつつ対馬市の北部にある上対馬高校で、高校生が地域の課題に取り組む総合学習のプログラムの企画と運営に取り組みました。これは九州大学の決断科学プログラムのプロジェクトで、地域おこし協力隊の時期は地域側のサポーターとして協力していましたが、復学後は手をあげてプロジェクトリーダーを担いました。最終的には高校と地域で自立して運営することを目指しつつ、高校の先生方と協力しながら全部で11回の授業の企画と運営を実施しました。

私が高校生の学びのテーマとして考えたことは、「実践と振り返りのサイクルを回す視点の習得」だったのですが、これはそのまま自分に返ってきました。プロジェクトは本当に手探り状態で、色々な苦労を経験しました。どこまで自分たちで実施してどこから地域に任せるのか、大学にいながら離島の先生方や地域の方と効率よく調整を進めるにはどうすれば良いか、いかに高校生に主体的に取り組んでもらうかなど、課題が山積みでした。

授業についても、毎回沢山の反省が出てきて、次回の授業の軌道修正を行なっていました。最初は生徒に目的を論理的に教えることが必要と思っていたのですが、言葉ではどうも伝わらない。そこで初めて体験で伝える方法を考え始め、知識としては知っていたつもりワークショップの意義を改めて理解しなおす。生徒たちが他のチームの活動を意識していることに気がつき、異なる経験をした高校生同士の意見交換をプログラムに組み込んでみる。このように、最初に思っていた通りには全く進まず、試行錯誤を通して方法論を組み立てていきました。

地域社会から得られた学びと現在の自分

修士論文については、対馬滞在の1年間で高齢者を取り巻く制度に関心があることがはっきりしたので、高齢者の生活に密接する訪問介護報酬の制度に課題を絞って研究を行いました。就職先についても、美容業界と介護業界に特化した人材情報を扱う情報ベンチャー企業を選択しました。対馬市役所も進路の選択として考えたのですが、今ある対馬の雇用に入り込むのではなく、対馬に仕事を作り出せるようになることが本場の課題と考えて



対馬学フォーラムにてプロジェクトの成果発表を行う (2018年12月)



上対馬高校における第1回目の総合学習の授業 (2018年4月)



上対馬高校教員を交えプロジェクトの進め方の検討会議を実施 (2018年1月)

就職先を選んだつもりです。就職先を探し始めた頃はまだ何ができるかわからず、対馬で起業のようなぼんやりしたことを言って親に怒られたりもしました。

大学での最後の年にシェアハウスに住んだことも進路に影響しました。シェアハウスの経営者の方は一旦商社で働いてビジネスのノウハウを身につけ、地域に開いた学生寮を作るといふ思いを持って福岡に戻り、自分のやりたかったことをビジネスとして実現しようとしており、彼と様々な話をする中で、事業を立ち上げるためにもビジネスの経験が重要であることを教わりました。そのような経緯から、ビジネスに関わる様々な経験ができる場としてベンチャー企業、その中で社会貢献をビジョンに掲げていることを条件に就職先を選択しました。

現在は介護業界の雇用支援を職務として働いています。電話で営業を行う他、アルバイトのマネジメント、新卒採用まで、ベンチャー企業なので本当に色々やっています。ビジネスを組織的にどのように実現するかを経験させてもらっているところです。

学生時代に地域で実践活動を行なって得られた学びとして実感しているのは、新規事業を考える時に、ビジネスモデルから考える他のメンバーに対し、まず現場の声を聞くマインドが身につけていることです。オフィスで考えるだけではなく、チームメンバーで現場に行くことを促しています。モデルとして考えたビジネスについても、現場でニーズがあることを確認するとその後のチームワークがスムーズになります。自分自身も週末はボランティアで介護施設に行つて高齢者と話をしています。現場を見ると、職員が困っている実態がわ

かる。ネットで調べても「人手不足」と言う表面的な問題はわかっていても、実際のオペレーションの問題は見えてきません。また、自分がなぜこの仕事をやっているか対馬での経験を基に話をすると、ビジネスの相手から信頼が得られる。実感や思いを持って仕事をしていることが伝わると、協力的になつていただけると感じることもあります。

今は東京で働いていますが、将来的には対馬が視野にあります。今の会社を通して対馬に関われる可能性もありますし、それ以外にも対馬に移住して自分の課題意識に挑むとしたら、どのような経験・キャリアが必要かを考えながら働いています。しかし、自分の課題意識と市場で収益を目指すことの乖離にはやはり葛藤があります。ビジネスとして実現するにはある程度の規模感が必要で、思いを残しつつ実現可能な構想を描けるようになるにはまだ時間がかかりそうです。東京にいる間にネットワークを形成しながら、地方で起業したい人とのつながりを増やしていく、今はそういうチャンスがある時期だと考えています。

第3講

違和感を確かめながら 自分の関心と社会の接点を探る

中央大学理工学部助教

土中 哲秀

2010年に九州大学経済学部に入學した土中哲秀さんは、興味のある数学と社会との接点を模索しながら、理論計算機科学分野の研究と企業への就職の進路の間で葛藤していました。研究を続けることの意義と社会に役に立ちたい思いの悩みに対し、子供の頃に縁が深かった地域社会での調査や取り組みに関わったことが、専門分野と社会をつなげて考えるヒントになりました。

現在、土中さんはオペレーションズ・リサーチの研究者として大学で教鞭を執っていますが、高度な科学的技法を探求する先に、社会問題の解決に至る道があることを見据えているようです。土中さんの大学生活の葛藤を通して、専門性の高い分野の学生が社会とのつながりを見出すために必要な学びが見えてきます。

地域社会での学びのポイント

- 最初は受け身でも構わないので多様なフィールドに参加してみる
- 学びに感じる違和感を大事にし、長い視点で地域社会をみつめる(急いで答えを求めない)



土中さんへのインタビューの様子 (2019年12月)



私は山口県山陽町出身で、実家は浄土真宗系のお寺です。現在は平成の大合併で山陽小野田市になりました。山陽町は最寄りの駅に電車が30分に1本通るぐらいの田舎で、都会に住んでみたいという思いを持って高校生を過ごしていました。勉強というか知識を蓄えることや考えることが好きな子供で、数学が得意だったのでそのまま数学を学びたいと考えていました。父親がお寺の住職と中学教員を兼業していたので、将来は自分も教員になるのかなとなく考えていました。

大学は実家からそれほど遠方ではない九州大学に進むのですが、学部を選択は色々と安易に考えてしまつて、数学が得意なものの工学部は機械を作る学部だから、やりたいことは理学部か、理系から受ける経済・経営学部かに絞り、キャンパスが都会にあつたことから経済学部を受験しました。ところが、経済学は数学を使うとはいふものの、文系的な分野に興味が持てず2年生まで選択を誤つたなあと思ひながら過ごしていましたが、経済学部は3年生で研究室配属があつたことに助けられました。

配属の説明会で数理工学の分野の先生を訪問したのですが、その先生がこれまでの学びに感じていた悩みをじっくりと聞いてくれ、経済学で数学を活用する分野の研究を勧めてくれました。その先生の研究室はとても小さく日本人の学生は私しかいなかったのですが、

3年生の途中でやっとやりたいことが見つかり、研究に没頭するようになりました。研究分野は理論計算機科学分野のオペレーションズ・リサーチで、一言で説明するならば「ネットワークの関係を迅速に抽出するためのアルゴリズム」ということになるでしょうか。なかなか説明の難しい分野なのですが、パズルを解いているような学問なので、数学が好きだつた私は夢中になりました。

数理工学と社会の接点の模索と葛藤

私は流されやすいところがあつて、経済学部のほとんどの学生が就職活動をする4年生の時に一週間程度就職活動もしたことがあります。これもまた安易に経済学部だし銀行かなと考えて数社回つたのですが、全く関心を持ってずに活動をやめました。大学院に進学するのですが、修士課程1年生の時も数学的なベースを持って社会に役に立ちたい思いがあり、情報システムの企業のインターンシップに参加するなど、研究者になるという確固たる意識はなかつたと思います。

ですが、研究には楽しんで没頭していません。経済学部は卒業論文がないのですが、その代わりに3年生の時に研究成果として学会発表を行いました。その後、4年生から修士課程1年生にかけてに進めていた研究の国際会議への投稿が決まつたことで飛び級できることになり、修士を1年で修了し、博士課程に進学しました。ただし、この博士進学に関して

も決して前向きな決断ではなく、進めていた研究が一定の業績に達しており、現在行っている研究が楽しいので、単純に年度的に早くなるのは悪いことではないのではというくらいの理由で進学を決めました。

しかし、博士進学を決めた後は、修士までに取り組んでいたテーマで研究を進めても博士論文に仕上げるのは難しいだろうというのが自分と指導教員の共通の見解となり、博士課程進学後すぐに論文の方向性で行き詰まりました。研究が行き詰まると、また就職に逃げようという考えが首を上げてきます。そして、博士課程1年生の夏に就職活動を行い、自身の研究分野であるオペレーションズ・リサーチを活用する会社のインターンシップを受けました。内容は道路混雑の解消や貨物輸送の効率化に関する業務で、仕事としては楽しかったのですが、5月に内定をもらって8月まで就職するかどうかずっと悩んでいました。

研究テーマが決まるのであれば研究を続けたいという思いと、テーマが見つからないのに大学に居続けた方がいいのかという悩みがありました。このような悩みを持ちつつも、研究テーマ探しを続けました。研究テーマ探しでは、より広い視野で考えようということを経済学部にも所属しているということに立ち返り、指導教員とは別の教員のところにも相談したりしていました。最終的には、数理工学と経済学を同時に研究できる環境は今しかないのではないかという思いに至り、研究の道に進むことを選びました。

大学院のプログラムによる地域社会との接触

修士課程1年生からは、決断科学プログラムにも参加しました。専門であるオペレーションズ・リサーチも意思決定のための学問であるので、いろいろな分野の研究者がどのようか意思決定にアプローチしているのか興味を持ったのがきっかけです。数学的なアプローチをしている教員がいなかったことで違和感があったのですが、文系の研究者と一緒に学ぶ機会は貴重だと考えて関わっていました。専門以外の知識はそれまであまり勉強していませんでしたので、最初の頃は議論の場などで何を話しているのか理解できなくて苦労した記憶があります。最終年度になってどうか、プログラムのメンバーがどのような筋道で何を話しているのか理解できるようになりました。議論の場などでは戸惑っていましたが、経済学部だけではなく様々な分野の学生や教員との交流は、博士課程進学の覚悟に影響しました。経済学部で博士に進む人はほとんどいないのです。周りに文系の博士過程まで進学した人が多かったことは心強かったです。

プログラムの中では、地域社会のガバナンスやまちづくりに関わる「統治モジュール」に所属しましたが、その選択は積極的な理由ではありませんでした。地域社会に特に関心があったわけではないですね。海外や遠方にまとめて調査に行くよりも同じ地域を何度も訪問する方が経験としては貴重なかなと思ったことと、お寺で育ったので地域の人の話を聞くことに苦手意識がなかったことから、参加していくうちに理解が深まることもあるだろ



対馬市長らに向けて、決断科学プログラムの取り組みをプレゼンテーション（2015年2月）

うという感覚での関わり方でした。お寺の子供で地域の爺ちゃん婆ちゃんからすぐく沢山話しかけられるんですよ。だから地域社会のコミュニティには馴染みがあった。

最初の頃は自分の地元の課題に引きつけてプログラムに取り組んでいました。自身の出身である山陽小野田市も含めて、過疎地域の最大の問題点は雇用がないことだと考えていたので、地域社会の雇用の問題をテーマに活動を始めました。関わり方は受け身で、実習として訪問した地域で雇用の課題の聞き取りを行っていた程度でしたが、転機は博士課程1年の11月にお寺の修行をしたことですね。それも積極的ではなく、博士に進むことの交換条件のような形で親に勧められました。そこから興味を持つてお寺とまちづくりの関係を調べるようになりました。そのうち、お寺がコンビニより多いことや歴史的にも集会場の機能を持つていることなど、まちづくりの重要な要素であることに気がつき、自分のためにも知っておくべきという課題意識が出てきました。こうしてみると積極的ではない受け身な行動からも色々学んでいますね。博士課程2年生の時期にはプログラムのフィールドである福岡県八女市のお寺で住職の方にヒアリングを行いながら、地域社会でのお寺の機能を積極的に調べるようになりました。

地域社会から得られた学びと現在の自分：専門分野と社会の接点

この頃、自分の専門分野でもようやく博士論文の研究テーマが見えてきて、専門と地域社会の関係についても考えるようになってきました。例えば、八女市に数理計画を利用したシステムが使われている乗合タクシーがあることを聞いて、取材のために現場を訪問しました。実は、数学は専門性が高いが裾野が広く応用できる分野でもあります。社会問題につながることもできますが、そのためには専門以外に広い課題意識を持つていることが大切です。オペレーションズ・リサーチですと、高齢化・過疎化が進む地方で最低限必要な公共交通を数理的に明らかにするなど、地域社会の意思決定に資するような研究の方向性もあります。私はまだ全然その領域には到達できていませんが、自分の専門領域に精通していくことで、社会問題に解を出すための筋道を導き出せる、そういうロールモデルとなる研究者の存在が、研究に没頭する時に出てくる迷いを払う一つの道標になっています。

これらを踏まえて、学際的な学びや地域社会との関わり方を振り返ってみると、最初はかなり受動的に活動に参加していたように思います。特に最初は、専門性が全く違う中、参加する楽しみも少なく、時にはかなり苦しい思いを感じたこともありました。しかし、受け身ながら関わっていると、3年位経つてようやく全く違う専門分野の人とも意思疎通ができるようになってきました。地域社会のことも最初は何もわからずに訪問してしました。何度も通つて話を聞く中でその人やその地域の考え方の背景が見えてくると途端に全体のつながりがわかるようになってきました。大学院で地域社会に関わったのは偶然かもしれませんが、それは自分の研究者としての歩みに影響を与える寄り道でした。地域に出る具体的な現場の課題に接したことで、数学の研究を通して社会に役に立つというビジョンが持てたという実感があります。



八女市内の寺院にて地域コミュニティとのつながりについてインタビューを実施 (2015年1月)



八女市内の道の駅における地域課題のヒアリングを実施 (2015年9月)



韓国・居昌にて地域住民の生活課題の聞き取りを実施 (2015年5月)



こうしてみると、自分の好きな数学と社会のつながりを模索していた学生時代を経て、数学の中でも他分野に適用することを意識した応用数学の研究者になったことは、高校から大学院までの色々な迷いと偶然が重なった結果であるのかもしれない。そのような中で、時には苦しいこともありましたが、大学院時代に多様な学びのあるプログラムに参加し、特に地域社会に触れる様々な経験ができたことは研究者人生でもプラスになったのではないかと思います。現在の自分から先に進んで、実際に社会と数学の橋渡しができるようになるにはまだまだ勉強が必要ではありますが、これからは葛藤しながらも研究者として頑張っていければと思います。

第4講

理論と実社会の問題をつなぐ 現場感覚を身に着ける

日本能率協会総合研究所

徳永 翔太

2009年に九州大学法学部に入学した徳永翔太さんは、現在は情報コンサルタントとして働いています。政治学の理論や評論に関心を持ち、学部時代はどちらかといえば本と格闘するような学び方をしていた徳永さんですが、政治理論を学ぶ中で「地域の絆」をより深く考えてみたい思いがあり、大学院で地域社会での学びのプログラムに参加しました。そこでは、理論として学んだことを具体的な地域の取り組みに反映させることを試みながら、時には理論とは異なる地域社会の実態と格闘する学生生活を送ったようです。

徳永さんの地域社会での経験、キャリアの選択、そしてビジネスパーソンとしての働き方から、理論と実際の社会問題の間をつなげるために必要な地域社会での学びが見えてきます。

地域社会での学びのポイント

- ・ 専門で得られた知見が地域の方々に伝わる方法を模索する
- ・ 地域で得られた知見を基に専門で学んだことを再考する



徳永さんへのインタビューの様子（2019年12月）



私は2018年3月に大学院博士課程を単位取得退学し、同年4月より日本能率協会総合研究所で働いています。情報コンサルタントという職業で、マーケティング分野に特化したビジネス情報の提供を行っている特徴のある企業です。私は大学の頃からずっと評論の仕事に憧れがあつて、大学から離れた仕事との折り合いがつけられるのか不安があつたのですが、幸い思いの方向性と合致する恵まれた仕事につけたのではないかと思つています。

政治学と評論の面白さに熱中した学部時代

評論に興味を持ち始めたのは高校を卒業する頃でした。宮台真司と宮崎哲弥の本を読みふけて、評論に興味を持ち始めました。ただ、高校の時は「弁護士のカズ」や「離婚弁護士」などのドラマの影響もあつて弁護士への憧れが強く、法学部を志望して入学しました。

でも、入ってみると法律はあまり性に合わなかった。当時、法律は論理的で体系的な分野で人間味がないと思つていました。そこでハマったのが人間臭いところのある政治学でした。授業で受けたマキャヴェリ論が面白かったことを覚えています。例えば、人材登用に嫉妬が関係してくるような部分です。法律も奥深いところまで学ぶとそういう側面があることは後になってわかつてきたのですが。ちなみに、学部の間は実際の地域と関係して学んだことはありませんでした。バイトとサークルが中心の生活でした。興味があつた政治学以外の

の授業はかなりサボっていました。

政治ゼミで卒業論文を書いた時は、自分の好きな宮崎哲弥のコミュニティアン思想と、その源流になつている人をテーマに取り上げました。具体的には、第二次世界大戦中にフランス人のアイデンティティの問題を問うたシモーヌ・ヴェーヌ、ケベックのアイデンティティを問うチャールズ・テイラーです。

なんとか論文を書き終え、就職活動はせず大学院に進みました。研究者を志望したというよりも、理論や評論とかゼミの活動が楽しかったのでそれを続けたくて進学した感じですね。そんなふわふわした理由で院に進んだのは今から考えるととても怖いことですね。よくそんな選択をしたものです。

理論と現場の違いの気づき：対馬島おこし実践塾での取り組み

大学院で地域社会と関わるようになったのも、理論からの関心でした。政治は自由を追求するためにあるという考え方と、絆やコミュニティの連帯がないと政治は成り立たないのではないかという考え方の対立「リベラルvsコミュニティアン抗争」に関心を持つて関連する政治理論に興味を引かれていました。正直な所、実践にはさほどの関心はなく、理論的な学びへの関心から決断科学プログラムにも参加し、地域社会のガバナンスを扱う統治モジュー

ルの活動に加わるようになりました。

プログラムでは福岡県八女市と長崎県対馬市の二つの地域を頻繁に訪問しました。前述のように実践には興味がなかったため、能動的にそのような行動や地域や選んだというよりも、プログラムが提供する実習に参加するという形でスタートでしたが、自分にとっては能動と受動の間の中動にあたる転機になりました。強制ではないが自発的でもなく、きっかけを与えられるような形で対馬市のプロジェクト「島おこし実践塾」に放り込まれました。文字通り何の前知識もないながら「お前行って来い」という感じで対馬に投げ込まれました。携帯の電話も圏外になるような地域に一週間滞在する体験でした。

実践塾は、持続可能な暮らしや地域振興など、将来の担い手を育成するための実践型短期合宿のプログラムです。初年度はプロジェクトの立ち上げ期で皆まだ何をやっていいかわからない中で、地域のNPOや住民の方々と一緒に耕作放棄地や高齢化問題など、限界集落での取り組みへの参加や現状調査を実施しました。そのとき初めて、新書などで評論家書いていた地域課題の解決が現場に即していないということに気がつきました。例えば、「耕作放棄地の活用を促す」というような一見説得力のありそうな政策提案はよく述べられますが、実際に開墾作業を体験してみると、現場を熟知せずに外から手に入る情報だけ集めて批評することの無意味さが見えてきます。

実践塾の経験でもう一つ大きかったのは、同世代の若者でこのような問題に意識を持っている人々を見たことです。そこで、これまで理論しかやってこなかった自分に何ができるか葛藤しはじめたのが修士過程2年生の時期です。まずは実践してみようと、対馬市の行政、商工会議所、旅行会社と連携した国境ツアーの企画に参加しました。これは「地域の人」に着目して対馬を廻るツアーで、企画を通して様々な人の話を聞き、行政の方々とも交流が得られました。対馬市は小さな自治体なので人間関係が濃密です。関係者の懇親会で訪れたスナックで対馬市長に政治がわかっていないと怒られたことが印象に残っています。とにかく実践を通して悩みながら答えを探していた時期でした。

また、地域の方への活動報告からも学ぶことは多かったです。1年目は今年何をしたらを伝える内容でしかなく、話の内容を面白くすることに注力しましたが、地域の方からは良い反応は返ってなかった。報告会を重ねることで、私自身が地域に何ができるか、当事者として関わるつもりであることを真剣に話すと聞いてくれることがわかってきました。聞きやすく話すことではなく、相手の欲しているものを提供できていることが重要です。このようなプレゼンテーションの内容についての気づきと合わせて、そもそもの活動に対する意識も変わりました。

理論と現場との往還：シティズンシップ教育の実践

その後博士課程に進学し、専門分野の研究ではバーナード・クリック、アンドリュー・ヘイ、コリン・ヘイなど、イギリスの現在の政治理論をテーマに選びました。学部時代は過去の



対馬学フォーラムでの活動報告（2015年12月）



対馬島おこし実践塾における講演会（2014年9月）



対馬島おこし実践塾において耕作放棄地の開墾を実施（2014年9月）

人物研究を行なっていましたが、実際の社会で起こっている問題を見ていく中で、現在の問題を問う理論に興味が向くようになりました。特にバーナード・クリックはシティズンシップ教育論でも知られますが、博士課程の時期は実際に地域に出て自分でシティズンシップ教育をやってみることで、その深みが実感できました。

シティズンシップ教育の実践は八女市と対馬市で行いました。八女市では地域の方を個別に訪問して高校生の前で話をしてもらおうをお願いをするなど、泥臭い活動からプログラムを開始しました。地域の方に参加してもらうことによって、地元がわかっていなかったと高校生に気がついてもらうことに成功し、大きな達成感が得られました。

対馬市の活動の初年度は高校の先生に任せきりで、たまに授業に参加する程度の関わり方でした。これはとても成功したとはいえませんでした。対馬の子は素直で素朴で人見知り。第一回の授業は緊張しきっていて、それをほぐすところから始めなければならぬ。数回程度の授業では心を開いてもらうことに不十分であることに気がつき、次年度は自分が教壇に立って、通算で2ヶ月程は対馬に滞在してプログラムを実施しました。余談ですが、授業の生徒の中に、以前中学生の時に自分のプレゼンテーションを見たという高校生がいてとても嬉しかったです。彼女はその授業ではグループの班長を担ってくれ、今後対馬市役所の職員になって、地域のためにいろんな活動をしたいと言っていました。地域で実践したこと、それを整理して発表したことが、地域社会に残っていることを実感しました。

この時期にイギリスも訪問し、シティズンシップ教育の理論だけではなく具体的な実践手法についても教えてもらいました。先進地域の理論と工夫を学びつつ、並行して自分で教育を実践し、授業を進める中で高校生の考え方が変わっていく実感が得られました。最終的には八女市、対馬市、大分県佐伯市の3つの高校で授業をしましたが、地域性や生徒の特質が違う中で、学んだ理論を実情に合わせて展開していく試みは面白かったですね。もともと純粋な研究者になりたいというよりも、評論ができるキャリア、ミドルマン、社会とアカデミックを架橋できる人間になりたい自分にとってはとても貴重な経験でした。理論政治学の一線の研究者で、私の研究対象でもあったコリン・ヘイ先生にも実際にお会いでき、八女や対馬での取り組みを紹介し、実際に活動していることを評価してもらえました。これは大きな自信につながりました。

地域社会から得られた学びと現在の自分

今思えば遅かったのですが、博士課程3年目でやっと踏み切りが付き企業への就職の道を模索し始めました。地域計画のコンサルタント、シンクタンク、大学の研究を中高生教育に展開する企業などに応募しました。やりたかったことは教育関連の企業が近いのではないかと思いましたが、最終的にビジネスを学びたいという思いから現職の情報コンサルタントを選択しました。

現在勤務している日本能率協会総合研究所は、ビジネス情報の専門特化機関として図書



宮台真司氏を招いたシンポジウムを企画 (2018年3月)



イギリス・プリマス大学にてシティズンシップ教育の実践に関する研究交流 (2016年10月)



八女学院高校の二年生を対象としたシティズンシップ教育の実践 (2016年7月)

館を運営し、会員向けに情報提供を行っている企業です。約2000社が会員ですが、日本の産業の縮図のように多様な企業にサービスを行っており、各分野の企業の将来ビジョンを知ることができません。日本のビジネスを学ぶには最適な環境で、評論をやつていく中でゼネラリスト的な視点を学べていると実感しています。

地域社会での経験も生きています。仕事はアシスタントの方20名に協力いただきながら業務を進めますが、これは地域社会でのマネジメントの経験が役に立っています。また、職務として社会人向けのワークショップやセミナーを実施するのですが、ワークショップについては高校生相手もビジネスマン相手も共通する部分が多い。セミナーについては、自分でプレゼンテーションを作り変えるような試みも行なっています。オリジナルの部分には、未来のビジョンを考える視点を盛り込み、新たなアイデアを提示して今後の行動の選択肢を増やしてもらうことを重視しています。これは大学院の時期に掴んだ自分のプレゼンテーションの核でもあります。近年は、フューチャリストと呼ばれる未来を考えることを専門とした職種が登場しており、獲得していきたい一つの専門性として意識しています。蛇足ですが、大学院にいる間は昼の12時に起きて夜の3時まで研究するような生活をしていたのですが、遅刻を一度もしてないことに安心しています。長らく学生をやつていても社会人生活に適応できますよ。

地域社会で揉まれる中で、地に足のついた議論ができるようになったことは仕事の様々な側面で実感しています。社会問題について問われた時、抽象的なロジックではなく耕作放棄地に取り組む住民や対馬市役所の職員、シティズンシップ教育で関わった高校生たち

の具体的な顔が浮かびます。ビジネスの現場で意見を求められる場合でも、地域で触れ合った彼らにどのように問題について語るかを意識しています。根拠がなく自分の議論に自信を持っていた学部生の頃と比べて、確実に厚みができています。

今はコンサルタントとして勤めつつ、いずれはアカデミックとビジネスの双方を理解して架橋できるキャリアを目指しています。そのための一つの試みとして、社会人をやりながら、週1回宮台真司先生のゼミに通っています。宮台先生は高校生からその著書に影響を受けていた、自分にとってのアカデミックヒーローです。未来の社会について、コンサルタントとしてはデータから学びつつ、合わせて学術的な理論も勉強し続けないと、目指す道に到達できないと考えています。アカデミックとビジネスの両方にどっぷり浸かっていくことで切り開ける社会との関わり方、貢献の手法があると思います。それが可能になるように研鑽を続けていくつもりです。

～第5講～

職能家教育では得がたい 多様性のマネジメントを学ぶ

九州大学病院メディカル・インフォメーションセンター学術研究員

古橋 寛子

2006年に九州大学歯学部に入學した古橋寛子さんは、高校時代に持っていたまちづくりへの関心から工学部と歯学部を受験で迷った時期がありました。しかし、大学学部でのプログラムの中では地域に出ることはほとんどなく、大学院生になって地域社会での学びに参加するようになりました。古橋さんの関心は、多様な背景の人との関係の構築や、チームワークの面白さにあったようです。

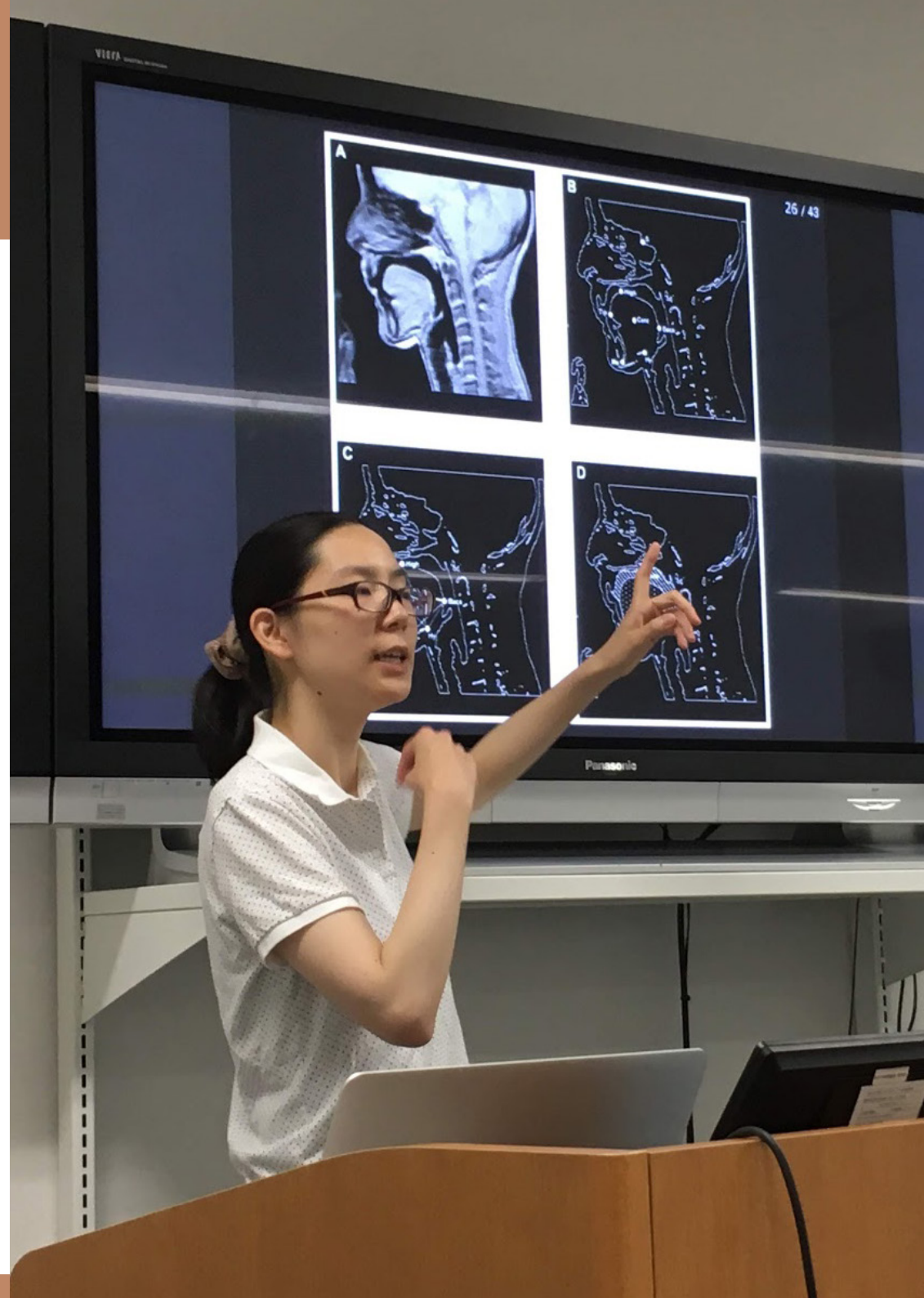
現在、九州大学病院で研究員として勤務する古橋さんの主なミッションは、医療情報の管理です。一見、地域社会での学びとのつながりは見えにくい仕事ですが、古橋さんの大学時代、大学院生時代の活動を通して、高度な専門家が社会の中で活躍するために役立つ地域社会での学びが見えてきます。

地域社会での学びのポイント

- ・ 人と人のつながりや関わりを意識して地域を観察する
- ・ 提案するだけでなく、企画の立ち上げから成果の報告まで通して経験する



古橋さんへのインタビューの様子（2019年10月）



私の大学生活での学びの一つの特徴は、歯学部という専門職の職能を養成するカリキュラムと並行して、色々な学部やバックグラウンドを持つ方々と一緒に企画することを楽しみに感じ、積極的にそのような場に飛び込んで、役割を請け負ってきたことにあります。「地域」や「まちづくり」という分野に関わったのは大学院生からですが、地域社会という一人一人の役割が重要なフィールドにおいても、様々な専門の人達で目的を共有して企画する難しさと面白さを知ったことが、貴重な経験となっています。

私の生まれは福岡県北九州市です。父は歯科医師で、今も現役で開業医として地域の方々の診療に当たっています。元々は外交官志望でおしゃべり好き、色々なことに首を突っ込むことも大好きな父の血をひいたようで、私自身も子供の頃から好奇心のカタマリと言われ、様々なことに興味をもってきました。幼い頃から、「可能性はできるだけ狭めるな、できるだけたくさん選択肢を残し、いろいろな人と出会える場所を選べ」と言われてきたこともあり、興味関心の赴くまま自由に中高と過ごしてきました。高校在学中は模試のたびに志望先が変わり、ある時はロケットを作りたいから航空宇宙工学、またある時は専業主婦になりたい！と言って、当時の担任から本気で考え直せと諭されたこともあります。そんな紆余曲折を経て最終的に大学入試の段階で興味を持っていたのがまちづくりと管楽器でしたが、どうしてもどちらかを自分で選ぶことはできなかったので、窮余の一策として前期ではまち

づくりを学べる都市工学、後期では管楽器奏者に関われそうな歯学部を受験しました。なかなか周りには見られない組み合わせだと思いますが、私の中では、人の暮らしに関わること、何かを作ることという点で共通点がある組み合わせでした。結果的に前期試験には落ちてしまったので、後期試験で合格した九州大学の歯学部に進学しました。そもそも歯学部が自然と選択肢に入っていたことについては、やはり父親の影響も大きいと思います。

サークル活動を通して知った社会活動の面白さ

それから6年間の歯学部時代は、まちづくりに関心を持つてはすっかり忘れており、地域に出て学ぶような機会はほとんどなかったですね。ですが、広い意味で色々な人間に触れたいという思いがやはりあり、入学後に歯学部のコミュニティは狭いなという意識もあつたので、新入生の時期に知った大学生協が主催している「M-project*」、通称エムプロの活動に没頭する学部生生活を送りました。エムプロはアルバイトとサークルのハイブリッドのような形で、新入生向けのパソコン講習会の企画運営を行なっていました。元々は学部1年生の時に受講生としてパソコン講習会を受けており、講習会終了後に先輩からスタッフに誘われたのがきっかけです。エムプロにはパソコンに詳しい工学部や理学部の学生はもちろん、法学部、農学部、医学部などの様々な学部から、学年も学部2年生から博士課程まで、多様な学生が男女問わず参加しており、仲間と一緒に活動することはとても楽しかったです。終電を逃すような時間まで会議や作業をすることも多かったです

*M-project

九州大学の学生有志によって実施されていたプロジェクトで、九州大学生協の支援の元、新入生を対象にしたパソコン・プレゼン講習会の企画・運営を行なっていた。2019年10月に活動を終了した。

が、全く苦になりませんでした。

他の同級生の卒業や、病院実習が始まって時間がなくなることから、エムプロの活動は4年生まで引退したのですが、それと同時期に市民吹奏楽団に入りました。吹奏楽は中学生の時に吹奏楽部に入って始めたのですが、高校生の時に勉強に専念するために離れており、機会があれば再開したいと思っていました。幸い、練習場も家から近く、初心者も歓迎してくれる今の楽団を見つかることができ、そこからずっと継続しています。大学の吹奏楽部ではなく市民楽団を選んだのはコンクールや上下関係といった部活的な活動ではなく、純粹に演奏することを楽しみたいからでした。余談ですが、この後初心者でも気軽に演奏を楽しめる場を作りたいという思いから、友人数名と一緒に歯学部で吹奏楽部を創部しました。現在では歯学部の公認も得ており、馬出吹奏楽部として活動が継続されているようです。

大学院でまちづくりへの思いに再会する

大学学部を卒業した後は、1年間研修医として九州大学病院に勤務した後、歯学府の博士課程に進学しました。歯学部は学部が6年間で、いわゆる修士課程のコースはなく、4年間の博士課程で学位取得を目指すカリキュラムなので、大学院の期間は他の学部よりも1年短くなります。専攻分野選びも大学入試のときと同じく悩みに悩みましたが、やりたかった管

楽器の研究をやらせてもらえるとということで口腔画像情報科学分野（いわゆる歯科放射線学）の研究室のお世話になることになりました。

大学院時代にも、やはり専門分野以外の企画の場を探して飛び込むことになったのが決断科学プログラムでした。医療系と社会科学の両方がプログラムに入っていることで視野が広がること、色々な専門分野の人と一緒に活動できることなどが説明会を聞きに行ってきたきっかけだったと思います。プログラムでは、高校時代に興味を持っていたまちづくりに関わることになり、積極的に手をあげて様々な企画に参加するようになりました。

歯学部の専門の学びと地域社会との学びの違い

まず、学びの中で驚いたことは、ゼミ形式の授業です。文系の方には当たり前で馴染みのある授業かもしれませんが、歯学部では学部の間はほとんどが講義形式でひたすら必修知識を学んでいくという生活でしたので受けたことのない形式でした。答えのある知識を学ぶのではなく、それぞれが関心を持って企画や、調査した内容を共有しながら意見交換する場は新鮮で楽しい経験でした。プログラムで初めて実施した屋久島でのフィールドワークではこのような気づきも視野に入れて、チームビルドのためにポスターセッションを取り入れた自己紹介のプログラムを企画しました。



屋久島フィールドワークにてポスタープログラムの説明を行う（2014年1月）

実習では多様な関心を持つグループの運営の大変さにも気づかされました。運営チームがそれぞれに参加者の関心に応じた趣向を凝らしたプログラムを作る中で、全体を見る役割のリーダーが決まっておらず、進行には様々なトラブルがありました。ここで、多様性を持ったメンバーのチームマネジメントに必要な情報共有やそのためのツールなどの大切さが気がつきました。こういった課題はエムプロの活動でも直面した経験があり、どのような組織にも共通の課題であることを実感しました。この気づきは、以降の地域でのメインの活動になっていく地域おこし協力隊の役割調査への関心にもつながりました。

屋久島では離島医療の実際を見学する機会も得られました。地域包括ケアのような地域社会の課題の現場に触れたことに加え、施設に連絡して見学のポイントメントを取る初めての経験ができたことは重要でした。普段自身が大学病院で勤務していることもあり、大きな病院は外から連絡を取ることに敷居が高いという意識がありました。が、きちんと手順を踏んで依頼することで、学生であっても組織の方に協力いただけるという実感が得られたことは、研究上のフットワークの軽さにつながりました。これは現在の専門分野の研究におけるアプローチにも生きていると感じます。

得られた新たな学びのテーマ

地域に関心を持つ中で私がメインのテーマに選んだのは、地域おこし協力隊の役割です。

協力隊が活躍するためには、地域社会で様々な課題や問題に対して新しい「仕事」を見つけておく必要があります。このような仕組みに関心を持ち、協力隊が担っている役割を探るため、福岡県八女市にプライベートな訪問も含めて何度も足を運びました。個人としてだけではなく、一緒に学ぶメンバーも誘ってグループワークを立ち上げ、最終的には制度を使って成果が出ている所と、出ていない所の違いを検討し、自治体と協力隊の人員のマッチングの課題について考察した論文*を作成しました。

特定の地域や人と長く関わることで気がついたことは、ギブアンドテイクの関係を築くことの重要性です。八女市では私の関心事項に対するヒアリングだけではなく、市の行政課題を受けた企画の提案も行いました。私は大学院2年生の時に結婚し翌年に出産を経験しているのですが、お腹が大きい時に地域おこし協力隊の方と一緒に企画した、木のおもちゃと触れ合うことで八女市の魅力に気がついてもらう木育キャラバンは、広い中山間地域を持ちつつ、保育士と木工職人が十分にいる八女市の特徴・課題と、妊婦であった私の課題意識が組み合わせられて生まれた企画です。このプログラムは実際に八女市の後援で実施されました。

子育てと活動と研究の並立期

前述のように私は大学院3年生の時に出産し、その後は子育てと並行して大学院での学び



木育キャラバンの様子(2015年9月)とパンフレット(左)

*古橋寛子(2017)「地域おこし協力隊制度活用のススメ…タイプ分けから考察する特徴・適地・支援の工夫」『決断科学』第3号



八女市立花地区の道の駅にてインタビューを実施(2014年12月)



決断科学プログラム(TED演習)でのグループワーク(2014年7月)

を継続しました。このため、復学以降はあまりフィールドに出ることはできず、地域おこし協力隊の調査も考えていた研究までたどり着けなかったことが心残りです。代わりに、シンポジウムの企画、ビブリオバトル、ライフプランについて学ぶ「オトナ塾」の立ち上げといった、学内でできるプログラムに活動の主軸が移りました。実習や企画をゼロから考えて実行に移した経験が自信になり、様々なプログラムの立ち上げに挑戦するハードルが下がって、自分のできる範囲でやりたい企画を実現できるようになったのがこの時期です。子育てと両立しながら専門分野の研究、そして多様な参加者を招く企画を進めたことは、時間の使い方を考える点でも大変勉強になりました。

オトナ塾は一人前の大人として人生の決断に必要な素養を身につけることを目的に企画しました。私自身が結婚、妊娠・出産という人生の一大イベントを経験して、もっと早く知っておきたかったことや後輩にはこういうことを教えておいてあげたいといったことが多く出てきたことがきっかけで思いついた企画です。各々が身につけたい素養のテーマを決めて活動を進めるスタイルで、私はライフプラン班に所属して、結婚・出産についてプログラム学生への意識調査を実施し、結婚と出産に関する全国調査との比較結果をまとめました。他には身だしなみや宗教がテーマになっていました。

地域社会から得られた学びと現在の自分

2017年の9月に博士論文の審査を終え無事学位を取得して大学院を修了しました。その後は大病院口腔画像診断科の医員として勤務していましたが、第二子の出産を契機に子育てと仕事を両立させることを考え、2019年から大病院メデイカル・インフォメーションセンター(MIC)の学術研究員として勤務しています。実は現在の所属長は決断科学の健康モジュールリーダーでもある中島直樹先生で、決断科学に在籍していたことが図らずもこのようなご縁につながりました。現在は、MICの業務としてがんゲノムパネル検査の情報管理業務にメインに取り組んでいます。研究面でも博士課程時代の管楽器の研究の継続と、漢方のポリファーマシー、抜歯時の抗菌薬使用ガイドラインの普及状況調査などの様々なテーマに取り組んでいます。

特にメインのがんゲノムパネル検査の業務については、病院内外の様々な職種の人に関わる分野です。病院内にロジスティクス(物流の最適化)を確立するために関係部署と交渉し、医師の先生方はもちろん、検査部、病理部、会計、事務など立場の違う状況を把握し、病院全体の課題として捉えることが求められます。また、日々の検査情報入力や結果データのハンドリングといった単純作業から、問い合わせ対応や視察対応、中央のシステム改修があればその院内対応、さらには全国レベルのワーキングへの参加など業務は多岐にわたります。特に、システム構築にあたっては、地域社会に関わる中で学んだ「誰かにとってのベストではなく全員にとってのベターを目指す」という姿勢が非常に役立っています。

また、学生時代に多様なバックグラウンドを持つメンバーとプロジェクトに取り組んでいた経験は、立場の違う方と仕事をする時に生きています。まず、簡単に聞こえるかもしれま



せんが、仕事を進めるにあたってできるだけメールや電話ではなく直接対面でお話に向うように心がけています。言葉にはできないニュアンスや非言語的なメッセージにはその方の本音が現れるので、そういった部分をできるだけ考慮して妥協点を探すようにしています。まだまだ始まったばかりの検査・制度で、中央の方針やシステムも未熟なため、いろいろな意味で「振り回される」ことが多くその点では苦勞します。しかし、院内のプロジェクトのメインメンバーが同世代でフットワークも軽く協力的なことが非常に助かっています。

私自身もできるだけ様々な分野の人の間に立つて仲を取り持つハブ的役割を果たしながらプロジェクトを引っ張ることができるよう努力していて、ありがたいことに評価もしていただいているようです。着任した当初は歯科医師の知識も経験も全く役立たない異分野に来たなと感じていましたが、約1年この業務に当たる中で折々に歯科医師であることが役立つ場面もあり、やはり何事もやってみなければ分からないものだなと考えを改めていきます。

このように、地域社会というフィールドで学際的なコミュニケーションの方法を試行錯誤したことは、大学病院という専門家の職能集団の中でリーダーシップを発揮するために必要な経験となりました。専門性の高い分野で学びを進めることを考えている皆さんも、将来の視野の広がりにつながる広い学びを意識して、地域社会で学ぶ機会を探してみたいかがでしょうか。

大学院からの地域連携

地域社会から学びを得るための5講

二〇二〇年三月三十日 発行

編集 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター統治モジュール

川崎修良 (同講師) .. はじめに、1、2、3、4、5講

鄭有景 (同助教) .. 2、3、4、5講

小幡あゆみ (九州大学大学院法学府博士課程) .. 5講

金東壹 (九州大学大学院生物資源科学府博士課程) .. 1講

スナトウーラ・ハイトフ (九州大学大学院法学府博士課程) .. 5講

陳シテイ (九州大学大学院工学府博士課程) .. 2、3、4、5講

発行 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター

〒八一九・〇三九五 福岡県福岡市西区元岡七四四

電話 〇九二・八〇二・六〇五〇

Eメール ketsudan@jimu.kyushu-u.ac.jp